

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K18554

研究課題名（和文）感覚過敏と他者視点取得能力の関係解明：cross-syndrome比較からの洞察

研究課題名（英文）Elucidating the Relationship between Sensory Sensitivity and the Perspective Taking Ability: Insights from a Cross-Syndrome Comparison

研究代表者

平井 真洋（Hirai, Masahiro）

名古屋大学・情報学研究科・准教授

研究者番号：60422375

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、自閉症スペクトラム症児者とウィリアムズ症候群児者を対象に感覚特性と社会応答特性ならびに他者視点取得能力の関係について検討した。その結果、感覚特性は両グループともに類似の非定型性がみられた。さらに社会応答性尺度については社会的認知、社会的気づきは両グループともに類似の傾向を示した。さらに感覚特性と社会応答特性の間には正の相関が見られ、感覚特性と視点取得能力についても検討した。これに加え、自閉傾向と感覚特性、不確かさ不耐性、不安、二分法的思考の関係についても明らかにし、感覚特性と認知特性の関係について検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題を通じ、自閉スペクトラム症とウィリアムズ症候群児者における社会応答特性と感覚特性の共通点と相違点について明らかにし、その発達変化について明らかにした。また、感覚特性と社会応答性にも関連があることを見出し、感覚特性と社会的認知の一つである視点取得特性についても検討した。本研究結果は、これまで自閉スペクトラム症とウィリアムズ症候群は社会性において対極にあるとされる報告に再考を促し、社会性を構成する要因について両グループの特性を詳細に検討する必要性を示した。また、感覚特性についても両グループにおいて共通する部分を見出しており、療育などにつなげることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study examined the relationship between sensory characteristics and social responsiveness, as well as the ability to take others' perspectives, in autistic individuals and individuals with Williams syndrome. The results showed that sensory profiles were similarly atypical in both groups. In addition, both groups showed similar trends in social cognition and social awareness on the social responsiveness scale. Furthermore, a positive correlation was found between sensory and social responsive traits, and sensory traits and the ability of perspective-taking were also examined. Additionally, the relationship between sensory profiles and cognitive characteristics was examined by clarifying the relationship between autistic traits and sensory characteristics, uncertainty intolerance, anxiety, and dichotomous thinking.

研究分野：発達認知神経科学

キーワード：自閉スペクトラム症 ウィリアムズ症候群群 疾患間比較 発達 定型発達 社会的認知 感覚特性

1. 研究開始当初の背景

近年、社会的知覚・認知の発達過程を解明する一つの手法として、社会性が異なる疾患の発達過程を比較するアプローチが提唱されている(Annaz et al. 2009)。特に社会的認知特性については、発症率が約44人に1人とされ、社会的コミュニケーションに困難を抱える自閉スペクトラム症児と発症率が約1万人に1人とされ、7番染色体の一部欠失に伴う遺伝性疾患であり、「過度な社会性」を有するウィリアムズ症候群児を対象に社会的認知特性を比較する手法が注目されている。自閉スペクトラム症に関しては、社会的認知特性と感覚特性に関する知見が蓄積されているものの、ウィリアムズ症候群においてはまだ十分な知見が蓄積されておらず、両者の知覚・認知特性の相違については十分明らかにされていないのが現状である。

研究代表者のこれまでの研究により、過度な社会性を有するウィリアムズ症候群児者においても社会的認知特性の一部については自閉スペクトラム症と類似する可能性を見出しているものの、感覚特性が両者においてどのように異なるのか、感覚特性がどのように社会的認知特性と関係するかについては殆ど明らかにされていないのが現状である。

2. 研究の目的

そこで本研究では、研究代表者らの一連の研究成果に基づき、これまで社会性が自閉スペクトラム症と対極にあると考えられてきたウィリアムズ症候群と知覚・認知特性を比較することにより、両者に共通する特性と異なる特性を解明し、感覚特性と社会的認知特性の関係について明らかにすることを目的とする。特に自閉スペクトラム症児者、ウィリアムズ症候群児者、定型発達者を対象とした社会的認知課題ならびに養育者を対象とした各種質問紙調査、眼球運動計測実験を通じ、自閉スペクトラム症児者ならびにウィリアムズ症候群児者の知覚・認知特性、特に感覚特性と社会的認知・他者視点取得能力の関係を明らかにすることを目的とした。具体的には以下の5項目を進めた。

【研究項目1】自閉スペクトラム症とウィリアムズ症候群における感覚特性の比較

【研究項目2】自閉スペクトラム症とウィリアムズ症候群における社会応答特性の比較

【研究項目3】自閉スペクトラム症とウィリアムズ症候群における感覚特性と社会的応答特性の関係

【研究項目4】ウィリアムズ症候群における感覚特性と社会的認知の関係

【研究項目5】自閉傾向・感覚過敏・不確実さ不耐性・二分法的思考・不安の関係

3. 研究の方法

【研究項目1】自閉スペクトラム症とウィリアムズ症候群における感覚特性の比較

本研究項目では、ウィリアムズ症候群児者と自閉スペクトラム症児者の感覚特性について比較し、両者の相違について明らかにすることを目的とする。DSM-5(American Psychiatric Association 2013)に示された診断基準のとおり、自閉スペクトラム症児者では感覚過敏特性を有することが数多く報告されている。一方、ウィリアムズ症候群児者においても自閉スペクトラム症と類似した感覚特性、特に聴覚過敏などの感覚過敏に関する報告があるものの限定的である。特に、両グループにおいて感覚特性のどの部分が類似し、どのように感覚特性が異なるのか、また、それらがどのように発達変化するかについては明らかにされていない。本研究項目ではSP感覚プロフィール質問紙(Dunn 1999; Hagiwara et al. 2015)を自閉スペクトラム症児者ならびにウィリアムズ症候群児者の養育者に実施し、両グループでの感覚特性の相違について検討する。その上でそれら特性が発達によりどのように変化するかを解明する。

【研究項目2】自閉スペクトラム症とウィリアムズ症候群における社会応答特性の比較

本研究項目では、ウィリアムズ症候群児者と自閉スペクトラム症児者の社会的認知特性を比較し、両グループの相違について明らかにする。これまで、ウィリアムズ症候群児者は過度な社会性を有するとされ、自閉スペクトラム症児者とは社会的表現型が対極にあると指摘されてきた(Jones et al. 2000)。しかしながら、両者の共通性も指摘されているものの(Asada and Itakura 2012)、どのような側面が類似し、異なるのかについては未だ明らかにされていない。そこで本研究項目では、社会応答性尺度(SRS-2; Constantino and Gruber 2012)を自閉スペクトラム症ならびにウィリアムズ症候群をもつ児の養育者を対象とした調査を実施し、社会応答性尺度の下位項目の比較を行う。これまで自閉スペクトラム症児者、ウィリアムズ症候群児者の養育者を対象とした社会応答性尺度に関する研究は数件にとどまり、いずれも年齢が限局したもののみである。本研究項

目では、さらに両グループにおける発達に伴う変化についても明らかにすることを目的とする。

【研究項目3】自閉スペクトラム症とウィリアムズ症候群における感覚特性と社会応答特性の関係

本研究項目では、研究項目1と2により、両グループの感覚特性と社会応答特性の関係について明らかにする。特に、自閉スペクトラム症児者とウィリアムズ症候群児者の感覚特性と社会的認知特性(社会的気づき、社会的認知)がどのように関係するか、さらにはどのように発達変化するかを明らかにすることを目的とする。

【研究項目4】ウィリアムズ症候群における感覚特性と社会的認知の関係

本研究項目では、社会的認知の一つである、他者感覚特性と他者視点取得の関係について、ウィリアムズ症候群を対象に眼球運動計測課題(他者視点取得課題)を実施し、研究項目1で計測した感覚過敏特性データと突き合わせることで感覚特性と社会的認知特性の関係について明らかにすることを目的とする。

【研究項目5】自閉傾向・感覚過敏・不確実さ不耐性・二分法的思考・不安の関係

本研究項目では、自閉傾向と感覚特性が認知特性にどのように関連するかについて明らかにすることを目的とする。具体的には、Stark et al. (2021)に提案されたモデルに基づき、自閉傾向が不確実さ不耐性を媒介として二分的思考に至る可能性について検討する。さらに、自閉傾向が感覚特性、不確実さ不耐性、二分法的思考、不安とどのような関係となるかを明らかにすることを試みる。まずは、自閉傾向が不確実さ不耐性、二分法的思考とどのような関係となるかを明らかにした上で、感覚過敏特性がどのように関係するかを明らかにすることを目的とする。

4. 研究成果

(1) 【研究項目1】自閉スペクトラム症とウィリアムズ症候群における感覚特性の比較

4歳から14歳の自閉スペクトラム症児39名(平均年齢:9.2歳)、3歳から19歳までのウィリアムズ症候群児者60名(平均年齢:9.9歳)を対象にSP感覚プロファイル質問紙を実施した。4つの象限(低登録、感覚探求、感覚過敏、感覚回避)における結果は、自閉スペクトラム症では、定型発達と同程度である割合は低登録、感覚探求、感覚過敏、感覚回避はそれぞれ15.3%、30.8%、30.8%、23.0%であった。一方、ウィリアムズ症候群では、定型発達と同程度である割合は低登録、感覚探求、感覚過敏、感覚回避はそれぞれ10.0%、20.0%、8.3%、18.3%であった。さらに各象限の群間・発達変化を解析したところ、低登録では、グループの主効果が有意であったが、年齢とグループの交互作用ならびに年齢の主効果は有意ではなかった。これより、ウィリアムズ症候群のスコアは自閉スペクトラム症群に比較して有意に高いことが明らかになった。感覚探求では、年齢の主効果と年齢とグループの交互作用が有意であったが、グループの主効果は有意ではなかった。これらより、自閉スペクトラム症児者のスコアがウィリアムズ症候群児者よりも発達に伴い有意に減少した。感覚過敏では、グループの主効果とグループと年齢の交互作用が有意であったが、年齢の主効果は有意ではなかった。これより、自閉スペクトラム症児者におけるスコアが発達に伴い有意に減少しているものの、ウィリアムズ症候群児者では年齢とともに有意に変化しないことが示された。また、感覚回避では、年齢の主効果と年齢とグループの交互作用は有意であったがグループの主効果は有意ではなかった。これらより、ウィリアムズ症候群児者のスコアは発達に伴い増加するものの、自閉スペクトラム症児者のスコアは発達により有意に変化しないことが明らかになった。これらより、自閉スペクトラム症とウィリアムズ症候群における感覚特性が一部類似する可能性を見出した。本研究成果は Journal of Autism and Developmental Disorders 誌に掲載された。

(2) 【研究項目2】自閉スペクトラム症とウィリアムズ症候群における社会応答特性の比較

4歳から55歳までの自閉スペクトラム症児者(平均年齢:19.4歳)の養育者75名、4歳から44歳までのウィリアムズ症候群児者(平均年齢:15.1歳)の養育者78名を対象とした社会応答性尺度(SRS-2)を用いた調査を実施した。結果、社会的動機づけならびに社会的コミュニケーションのTスコアは自閉スペクトラム症者においてウィリアムズ症候群児者よりも有意に高いことが確認されたものの、社会的気づき、社会的認知、興味の極限と反復行動に関するTスコアは自閉スペクトラム症群とウィリアムズ症候群で有意差は見られなかった。また、発達に伴う変化についても解析した結果、自閉スペクトラム症児者ならびにウィリアムズ症候群児者においても発達に伴い減少することが認められたものの、その割合がグループ間で異なることを見出した。本研究は Journal of Autism and Developmental Disorders 誌に掲載された。

(3) **【研究項目 3】自閉スペクトラム症とウィリアムズ症候群における感覚特性と社会的認知の関係**

研究項目 1 と研究項目 2 において得られた自閉スペクトラム症児者とウィリアムズ症候群児者における感覚特性データと社会応答性尺度を突き合わせ、両者の関係について検討した。結果、感覚探求と社会的コミュニケーション、興味の限局性と低登録、興味の限局性と感覚探求の間に正の相関が見られた。これらの関係について現在詳細に解析・検討を進めている。

(4) **【研究項目 4】ウィリアムズ症候群における感覚特性と社会的認知の関係**

Ikeda et al. (2022)の手法を用い、ウィリアムズ症候群児者における他者視点取得能力と感覚特性の関係について検討した。現時点において 14 名のデータを取得中であり、所定の計測人数に達したところで解析を実施する予定である。

(5) **【研究項目 5】自閉傾向・感覚過敏・不確実さ不耐性・二分法的思考・不安の関係**

自閉傾向と不安、認知様式に関する Stark et al. (2021)のモデルを検証するため、本研究では、それぞれの特性を評価する 3 つの質問紙(自閉スペクトラム指数、The short Intolerance of Uncertainty Scale 日本語版、二分法的思考尺度)を用いることにより、提案されたモデルの妥当性について検討した。予備調査として 151 名の成人(非臨床群の大学生)を対象とした質問紙調査により、自閉スペクトラム傾向の高さは不確実さ不耐性を媒介して二分的思考に至ることを確認した。ただし、自閉スペクトラム傾向と二分的思考法の間には負の関係を見出した。予備調査の結果により、非臨床群の大学生と同年代(20-22 歳の男女)の多様な職種の 500 名(非臨床群の一般成人)を対象とした本調査においても予備調査と同様の傾向を認めた。今回の研究では、非臨床群の大学生・一般成人を対象とした研究であるものの、Stark ら(2021)の認知モデルの妥当性を示す結果を得て、本論文は Scientific Reports に掲載された(Suzuki and Hirai 2023)。さらに現在当該研究を発展させ、自閉傾向、感覚特性、不確実さ不耐性、不安、二分法的思考の関係についても検討している。結果、不安、二分法的思考はともに不確実さ不耐性により媒介されるものの、当初 Stark らが想定していた不安と二分法的思考の間には有意な関係は認められなかった。本研究成果は現在投稿中である。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and statistical manual of mental disorders: DSM-5. DSM-5 Task Force. Washington, D.C., American Psychiatric Publishing.
- Annaz, D., A. Karmiloff-Smith, M.H. Johnson, M.S. Thomas (2009). A cross-syndrome study of the development of holistic face recognition in children with autism, Down syndrome, and Williams syndrome. *J Exp Child Psychol* 102, 456-86 doi:10.1016/j.jecp.2008.11.005
- Asada, K., S. Itakura (2012). Social phenotypes of autism spectrum disorders and williams syndrome: similarities and differences. *Front Psychol* 3, 247 doi:10.3389/fpsyg.2012.00247
- Constantino, J.N., C.P. Gruber (2012). *Social Responsiveness Scale, Second edn.* Los Angeles, CA, Western Psychological Services.
- Dunn, W. (1999). *The Sensory Profile: User's Manual.* San Antonio, TX., Psychological Corporation.
- Hagiwara, T., R. Iwanaga, H. Ito, I. Tani (2015). *The Japanese version of sensory profile,* Nihon Bunka Kagakusha.
- Ikeda, A., Y. Kanakogi, M. Hirai (2022). Visual perspective-taking ability in 7- and 12-month-old infants. *PLoS One* 17, e0263653 doi:10.1371/journal.pone.0263653
- Jones, W., et al. (2000). Hypersociability: The social and affective phenotype of Williams syndrome. In: George, M.S. (ed) *Journey from cognition to brain to gene.* (pp43-71). London: : The MIT Press.
- Stark, E., J. Stacey, W. Mandy, M.L. Kringelbach, F. Happe (2021). Autistic cognition: Charting routes to anxiety. *Trends Cogn Sci* 25, 571-581 doi:10.1016/j.tics.2021.03.014
- Suzuki, N., Hirai, M. (2023). Autistic traits associated with dichotomic thinking mediated by intolerance of uncertainty. *Sci Rep* 13, 14049 doi:10.1038/s41598-023-41164-8

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 10件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Hirai Masahiro, Asada Kosuke, Kato Takeo, Ikeda Takahiro, Hakuno Yoko, Ikeda Ayaka, Matsushima Kanae, Awaya Tomonari, Okazaki Shin, Kato Toshihiro, Funabiki Yasuko, Murai Toshiya, Heike Toshio, Hagiwara Masatoshi, Yamagata Takanori, Tomiwa Kiyotaka, Kimura Ryo	4. 巻 -
2. 論文標題 Comparison of the Social Responsiveness Scale-2 among Individuals with Autism Spectrum Disorder and Williams Syndrome in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Autism and Developmental Disorders	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s10803-022-05740-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hirai Masahiro, Hakuno Yoko	4. 巻 170
2. 論文標題 Electrophysiological evidence of global structure-from-motion processing of biological motion in 6-month-old infants	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Neuropsychologia	6. 最初と最後の頁 108229 ~ 108229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.neuropsychologia.2022.108229	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kushima Itaru, et al.	4. 巻 92
2. 論文標題 Cross-Disorder Analysis of Genic and Regulatory Copy Number Variations in Bipolar Disorder, Schizophrenia, and Autism Spectrum Disorder	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Biological Psychiatry	6. 最初と最後の頁 362 ~ 374
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.biopsych.2022.04.003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村亮	4. 巻 28
2. 論文標題 高い社交性を呈する希少疾患、ウィリアムズ症候群	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 難病と在宅ケア	6. 最初と最後の頁 45-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村亮	4. 巻 65
2. 論文標題 症例報告のポイント 希少疾患研究 ウィリアムズ症候群	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 精神医学	6. 最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Okazaki Satoshi, Kimura Ryo, Otsuka Ikuo, Funabiki Yasuko, Murai Toshiya, Hishimoto Akitoyo	4. 巻 17
2. 論文標題 Epigenetic clock analysis and increased plasminogen activator inhibitor-1 in high-functioning autism spectrum disorder	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0263478
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0263478	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ikeda Ayaka, Kanakogi Yasuhiro, Hirai Masahiro	4. 巻 17
2. 論文標題 Visual perspective-taking ability in 7- and 12-month-old infants	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0263653
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0263653	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hirai Masahiro, Sakurada Takeshi, Ikeda Takahiro, Monden Yukifumi, Shimoizumi Hideo, Yamagata Takanori	4. 巻 64
2. 論文標題 Developmental changes of the neural mechanisms underlying level 2 visual perspective taking: A functional near infrared spectroscopy study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Developmental Psychobiology	6. 最初と最後の頁 e22229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/dev.22229	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hirai Masahiro, Sakurada Takeshi, Izawa Jun, Ikeda Takahiro, Monden Yukifumi, Shimoizumi Hideo, Yamagata Takanori	4. 巻 11
2. 論文標題 Greater reliance on proprioceptive information during a reaching task with perspective manipulation among children with autism spectrum disorders	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Scientific Reports	6. 最初と最後の頁 15974
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41598-021-95349-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Suzuki Noi, Hirai Masahiro	4. 巻 13
2. 論文標題 Autistic traits associated with dichotomic thinking mediated by intolerance of uncertainty	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Scientific Reports	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41598-021-95349-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ikeda Ayaka, Hakuno Yoko, Asada Kosuke, Ikeda Takahiro, Yamagata Takanori, Hirai Masahiro	4. 巻 16
2. 論文標題 Development of emotion comprehension in children with autism spectrum disorder and Williams syndrome	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Autism Research	6. 最初と最後の頁 2378 ~ 2390
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41598-023-41164-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hirai Masahiro, Ikeda Ayaka, Kato Takeo, Ikeda Takahiro, Asada Kosuke, Hakuno Yoko, Matsushima Kanae, Awaya Tomonari, Okazaki Shin, Kato Toshihiro, Heike Toshio, Hagiwara Masatoshi, Yamagata Takanori, Tomiwa Kiyotaka, Kimura Ryo	4. 巻 -
2. 論文標題 Comparison of the Sensory Profile Among Autistic Individuals and Individuals with Williams Syndrome	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Autism and Developmental Disorders	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/aur.3053	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 平井真洋
2. 発表標題 脳波を用いた他者の動き知覚に関する発達
3. 学会等名 第22回学術集会 - 日本赤ちゃん学会指定演題ラウンドテーブル 基礎-現場の架け橋としての赤ちゃん研究
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Masahiro Hirai, Yasuhiro Kanakogi & Ayaka Ikeda
2. 発表標題 Inefficient action toward infants can induce preference and learning
3. 学会等名 The international congress of infant studies 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 杉山恵里菜, 太田直斗, 平井真洋, 北神慎司
2. 発表標題 話者交代成績におけるASD傾向と視覚情報処理の関係
3. 学会等名 第34回日本発達心理学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 杉山恵里菜, 成松宏美, 平井真洋, 小林哲生
2. 発表標題 子どもの読書頻度は感情語の習得に関係するか？
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鶴田裕子・永田雅子
2. 発表標題 早期支援を受けた自閉スペクトラム症児の特徴
3. 学会等名 日本乳幼児医学・心理学会 第32回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鶴田裕子・三谷真優・永田雅子
2. 発表標題 学齡期児童のロールシャッハ反応における認知的特徴 ASD児と極低出生体重児に着目して
3. 学会等名 日本小児精神神経学会 第128回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平井真洋
2. 発表標題 ウィリアムス症候群児者における社会的認知の階層的処理
3. 学会等名 第117回日本精神神経学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平井真洋、櫻田武、井澤淳、池田尚広、門田行史、下泉秀夫、山形崇倫
2. 発表標題 視点変換リーチング課題による自閉スペクトラム症児の体性感覚優位性の解明
3. 学会等名 第13回自閉症学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木村亮
2. 発表標題 超社会性を呈する希少疾患ウィリアムズ症候群とは
3. 学会等名 第117回 日本精神神経学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村亮, 鈴木志穂, 西村泰生, 前川真吾, 萩原正敏
2. 発表標題 ゼブラフィッシュを活用した神経発達症研究の現状と課題
3. 学会等名 第7回 ゼブラフィッシュ・メダカ創薬研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平井真洋
2. 発表標題 他者の動きに埋め込まれた顕示的情報処理の発達
3. 学会等名 日本赤ちゃん学会第23回学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 平井真洋
2. 発表標題 実験データに基づく認知発達の理論化：他者の動き知覚発達を例として
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Masahiro Hirai
2. 発表標題 Exploring social phenotype in Williams syndrome: cross-syndrome approach
3. 学会等名 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 杉山 恵里奈, 太田 直斗, 平井真洋, 北神 慎司
2. 発表標題 話者交替判断時の視覚的注意配分パターンとASD傾向の関係
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ryo Kimura
2. 発表標題 Williams syndrome: Clinical features, diagnosis, and management
3. 学会等名 The 11th Congress of The Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 平井真洋	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 264
3. 書名 認知科学講座2 心と脳 (認知科学講座 2) 脳と社会的認知	

1. 著者名 平井真洋	4. 発行年 2022年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 368
3. 書名 図説 視覚の事典 「自閉症,ウィリアムス症候群の視覚認知」	

1. 著者名 平井真洋	4. 発行年 2022年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 公認心理師基礎用語集 増補第3版 よくわかる国試対策キーワード「感覚」「知覚」「乳児を対象とした実験」	

1. 著者名 永田雅子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 170
3. 書名 乳幼児健診とそのフォロー 津川律子・黒田美保 これからの現場で役立つ臨床心理検査	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	永田 雅子 (Nagata Masako) (20467260)	名古屋大学・心の発達支援研究実践センター・教授 (13901)	
研究分担者	木村 亮 (Kimura Ryo) (20636641)	京都大学・医学研究科・准教授 (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------